2024 年 11 月 7 日（木）

薬師寺回廊西北隅・鐘楼の調査（平城第 665 次）
記者発表資料

法相宗大本山　薬師寺

独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所 都城発掘調査部

※現地見学会を 11 月 9 日（土）11:00～15:00 に実施します（小雨決行）。

所 在 地 ： 奈良県奈良市西ノ京町 457
調査原因 ： 史跡整備にともなう発掘調査
調査面積 ： 468 ㎡　　＊東西 16m・南北 24m＋東西 4 m・南北 21m
調査期間 ： 2024 年 9 月 2 日～ 継続中

【 概　要 】

回廊の西北隅を検出し、回廊の規模と構造があきらかとなりました。また、鐘楼の東辺と南辺を検出し、鐘楼の規模が確定しました。薬師寺中心伽藍の詳細にかんする重要な成果をあげることができ、今後の史跡・伽藍整備に資する情報が得られました。

１．調査の経緯と目的

（1）薬師寺と発掘調査

薬師寺　薬師寺は、680（天武天皇９）年に、天武天皇が皇后（のちの持統天皇）の病気平癒を祈願して発願した寺院です。これが藤原京の薬師寺で、現在は本薬師寺（奈良県橿原市城殿町）と呼ばれています。その後、710（和銅３）年の平城遷都にともなって、平城京右京六条二坊に新たに造られました（図１）。

『薬師寺縁起』（1015[長和４]年）によれば、718（養老２）年に伽藍[がらん]を移すとの記載がありますが、東僧房の発掘調査で 716（霊亀２）年の紀年銘木簡が出土したことなどから、その頃には造営を開始していたと考えられます。

伽藍の発掘調査と復元整備　薬師寺では、1934 年に西塔、1954 年に南大門と中門で小規模な発掘調査が実施されましたが、本格的な発掘調査は白鳳伽藍の復興を目的として 1965 年に始まります。1969 年には近畿大学が金堂・講堂などで、1993 年にかけて奈良文化財研究所が講堂、西塔、鐘楼、回廊などで発掘調査を進めてきました（図２）。それらの調査成果を受けて、主要堂塔を復興し、回廊に囲まれて金堂と講堂そして東・西塔が並び建つ荘厳な姿を目にすることができるようになりました。

2012 年には「史跡薬師寺旧境内保存整備計画」を策定し、新たな整備事業と発掘調査を進めました。2012・2013 年には、講堂の北側に位置する食堂と十字廊を全面的に発掘調査し、食堂は復元的に整備

し、十字廊は遺構表示のかたちで整備しました。また、2014・2015・2020 年に実施した東塔の解体修理にともなう発掘調査は記憶に新しいところでしょう。

（2）これまでの発掘調査－成果と課題－

回　廊　　金堂や東塔などの主要堂塔を取り囲む回廊については、1968 年の発掘調査を端緒として、これまでに 10 回（1968・1969・1971・1974・1982・1985・1988～1990・1992 年）にわたって発掘調査を実施してきました。その結果、回廊は梁行[はりゆき] 1 間の単廊[たんろう]として造営に着手したが、途中でその計画を変更し、梁行 2 間の複廊[ふくろう]として完成したことがわかりました。単廊と複廊はいずれも礎石建ち瓦葺きで、その規模（外側柱間）は東西約 124m、南北約 113m とされています。なお、973（天禄 4）年に焼失し、それにともない 11 世紀初頭に再建されました。それ以降も倒壊と再建を繰り返し、1361（康安元年）年の地震による倒壊ないし 1528（享禄元）年の兵乱による焼失以降、回廊は再建されなかったようです。

これまでに回廊の大部分が発掘調査されましたが、西北隅の一角は未調査でした。近年まで水田として利用されてきたこともあり、地下遺構の状況が不明です。こうした状況から、より正確に回廊の規模・構造を把握するために、西北隅の発掘調査が求められてきました。

鐘　楼　　1974（昭和 49）年に発掘調査を実施し、北辺・西辺の基壇外装[きだんがいそう]抜取溝、北面・西面階段（地覆石[じふくいし]）を確認できました。階段が四辺中央に位置すると仮定して、基壇規模は東西約 15.7m、南北約 19.2m と推定しました。基壇上面は削平されており、礎石位置を把握できませんでしたが、『薬師寺縁起』の記述も参考にすれば、鐘楼の建物規模は桁行[けたゆき] 3 間、梁行 2 間（柱間寸法 3.7m[12.5 尺]等間）と考えられます。なお、回廊と同じく、鐘楼も罹災[りさい]と再建を繰り返してきました。現在、講堂の東背後に建つ鐘楼は、1937 年に再建して 1975 年に移築したものです。

このように鐘楼の規模は一定の確度で復元できますが、東辺と南辺を発掘調査し、地下遺構の状況を把握するとともに、より正確に規模を把握する必要があります。

（3）今回の発掘調査の目的

今回の発掘調査地は、回廊の西北隅および鐘楼の東・南辺の位置にあたります（図 3）。調査の目的は、２つです。地下遺構の状況を把握すること、そして回廊および鐘楼の規模・構造を確定することです。回廊の西北隅、鐘楼の東・南辺は、それぞれの規模・構造を把握するためにとても重要な場所です。回廊と鐘楼の規模・構造について再検証し、より正確に復元するための新たな情報が得られるものと期待されます。

２．調査の成果

（1）回廊の遺構

複 廊　　礎石[そせき]はすべて抜き取られていましたが、新たに 14 基の礎石据付穴・抜取穴を検出しました（図 4）。据付穴は一辺約 1.4m の方形で、抜取穴は不整形です。柱穴の検出位置から西北角の位置が判明し、折れ曲がる様子がよくわかります。梁行は約 3.0m（10 尺）等間で、桁行については西北隅の 2 間分は約 3.0m（10 尺）、それ以外は約 4.1m（14 尺）となります。また、棟通り[むなどおり]に据えられた凝灰岩を検出しました。これは、中央の棟通りに壁を設けていたことを意味します。

複廊の基壇は、黄褐色の粘質土を積み、凝灰岩の外装をもちます。北面では地覆石と羽目石[はめいし]が良好に残っており、さらに一部ですが敷石[しきいし]も残っていました。西面では、地覆石がわず

かに形状をとどめる程度でしたが、羽目石７個が転倒している状況を確認しました。羽目石は横幅42 ㎝・高さ 28cm・厚さ６㎝ほどです。基壇の幅は約 9.4m となります。基壇の外側では雨落溝を検出し、底に直径約 20cm の玉石を一列敷いています。

複廊の礎石据付穴は、一時期分だけです。したがって、複廊は幾度かの罹災・再建を経ていますが、創建時の礎石（柱位置）を踏襲しつづけたと考えられます。一方、基壇外装の凝灰岩をみると、その大きさに少しばらつきがあります。基壇外装は一部改修の手が加わっている可能性がありますが、基壇幅などの規模は創建時のままであったと思われます。

単　廊　　単廊の礎石据付穴・抜取穴は上層の複廊にともなう基壇土に覆われているため、新たに検出できたのは２基にとどまります。礎石据付穴は一辺約 1.2m の方形で、その検出位置から複廊と同じ位置に西北隅を想定できます。なお、検出数が少ないので柱間寸法を正確に知ることは難しいですが、従来どおり、桁行・梁行ともに約 3.7m（12.5 尺）等間とみてよいでしょう。このほか、想定される西側柱列で一部列状に瓦敷がみられ、壁持地覆[かべもちじふく]を受ける可能性があります。

（２）鐘楼の遺構

鐘楼の東北隅で、凝灰岩の基壇外装と雨落溝[あまおちみぞ]の底石（直径約 20 ㎝の玉石）を検出しました（図４）。東辺では基壇外装および東面階段の凝灰岩はすべて抜き取られていましたが、抜取溝を検出できました。抜取溝は中央付近で東側へ「凸」状に張り出し、これが東面階段の痕跡となります。東面階段は東辺の中央に位置し、幅約 4.1m となります。ただし、土層の観察から、改修後の基壇外装を抜き取った溝の可能性があります。南辺でも基壇外装とその抜取溝を検出しています。鐘楼の基壇規模は、ほぼ従来の推定どおり、東西約 15.7m、南北約 18.8m と考えられます。

この基壇外装は後世に改修したものである可能性が高く、改修の時期や創建基壇については現在調査中です。

（３）出土遺物

調査地の各所から、古代から近世までの瓦や土器が出土しました。

３．まとめ

（１）創建時の遺構が良好な状態で残っていました。

回廊の礎石は抜き取られていましたが、回廊の基壇外装（羽目石・地覆石）や壁持地覆石が残っているなど、創建時の遺構が良好な状態で保存されていることがわかりました。

（２）回廊西北隅を検出し、回廊の規模と構造が確定しました。

複廊は、桁行約 4.1m・梁行約 3.0m で、棟通りに壁を備える礎石建ち瓦葺き建物で、高さ約 36 ㎝の基壇をもつことがわかりました。回廊全体の規模は西面約 115m、東面約 113m、南面約 123m、北面約 124m となります（図５）。さらに、今回の調査によって、西面回廊の柱間は 25 間である可能性が高まりました。東面回廊が 24 間、北面回廊が 16 間、南面回廊が 20 間という従来の所見も考え合わせると、回廊の柱間が『薬師寺縁起』の記載のとおり、東西非対称となる可能性が高いです。

（３）鐘楼の東辺・南辺を検出し、鐘楼の規模が確定しました。

鐘楼は東西約 15.7m・南北約 18.8m の基壇をもち、階段を備えることがわかりました。また、鐘楼西辺基壇縁と西面回廊西辺基壇縁の東西位置がよく揃い、伽藍配置に高い計画性が窺えます。

一四面廊一迺。南面廿間。北面十六間。
東面廿四間。西面廿五間。天禄四年
二月廿七日夜焼亡。（以下省略）

『薬師寺縁起』抜粋

（『大日本仏教全書』より）

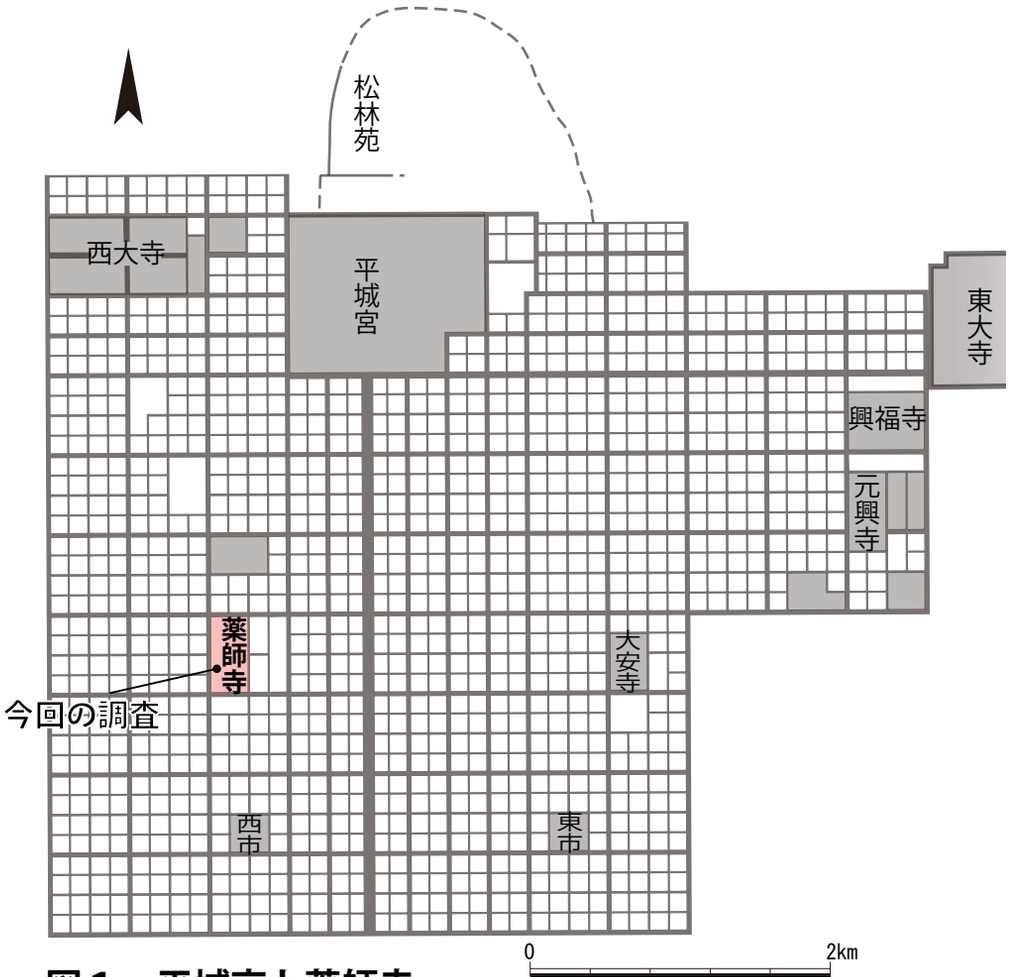


図１　平城京と薬師寺

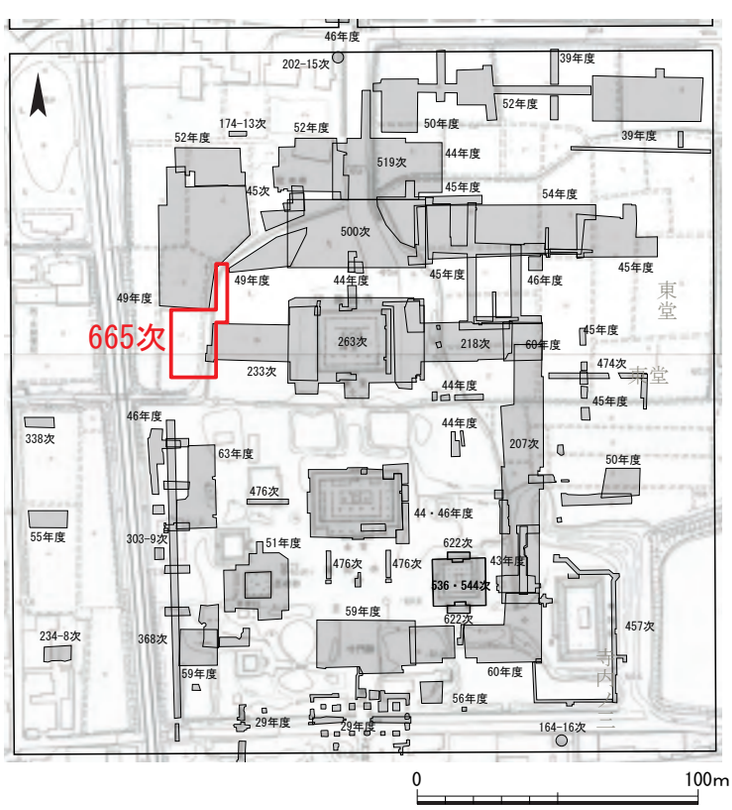


図２　薬師寺旧境内における発掘調査

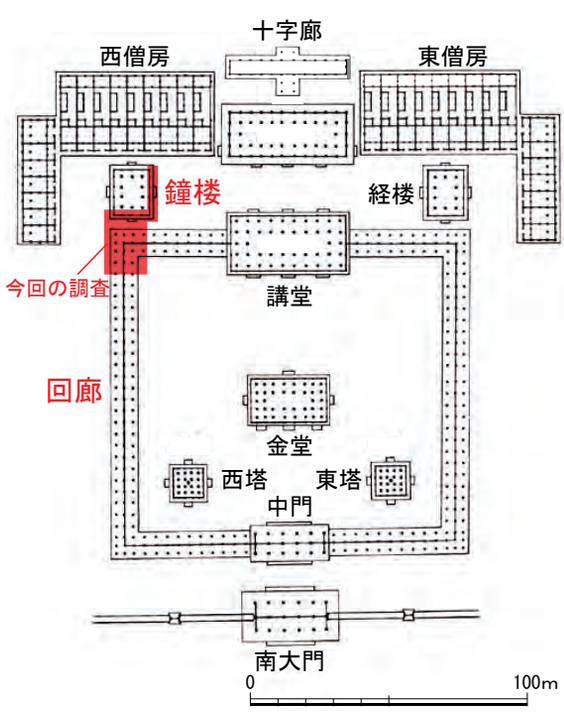


図３　薬師寺中心伽藍と今回の調査

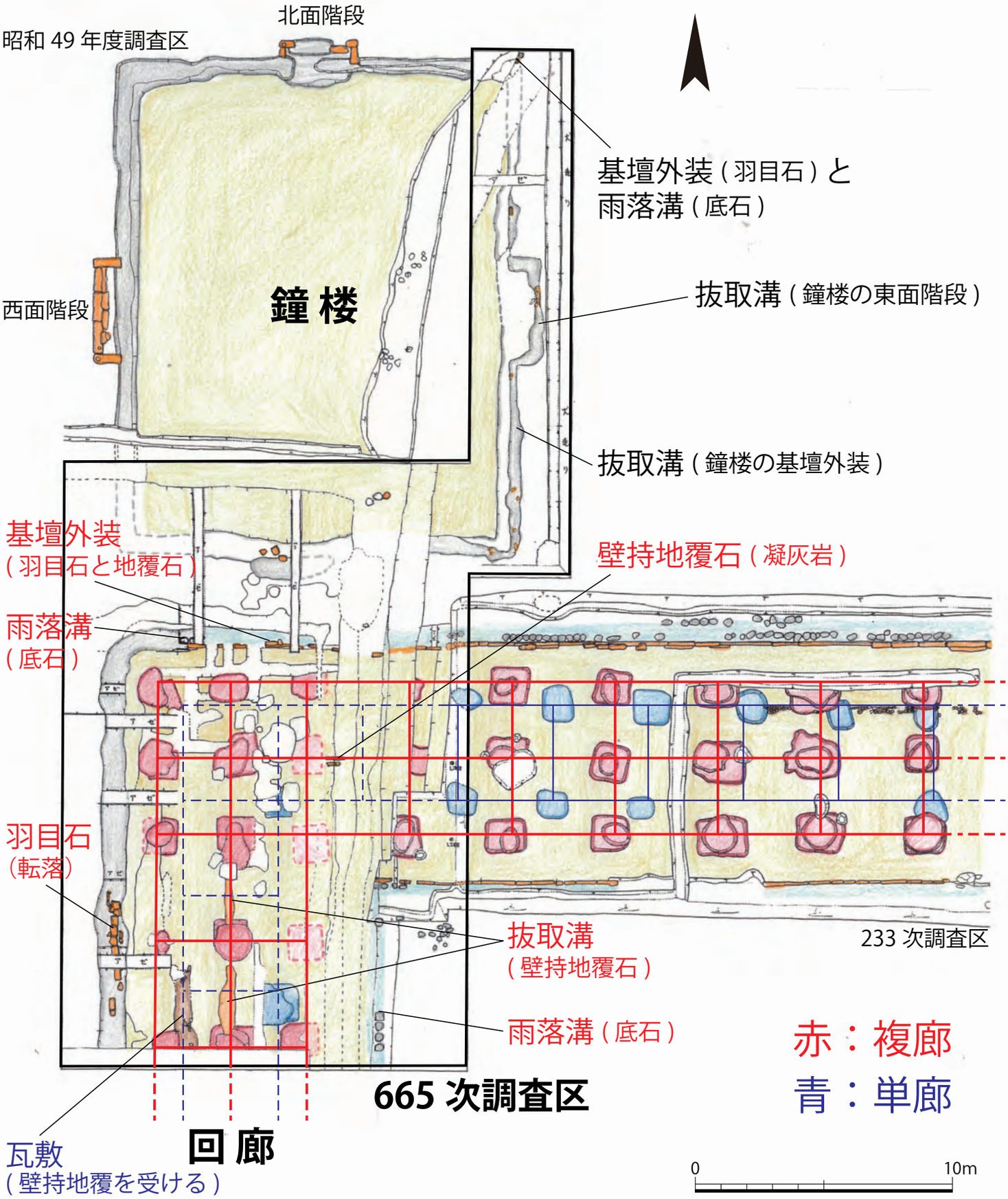
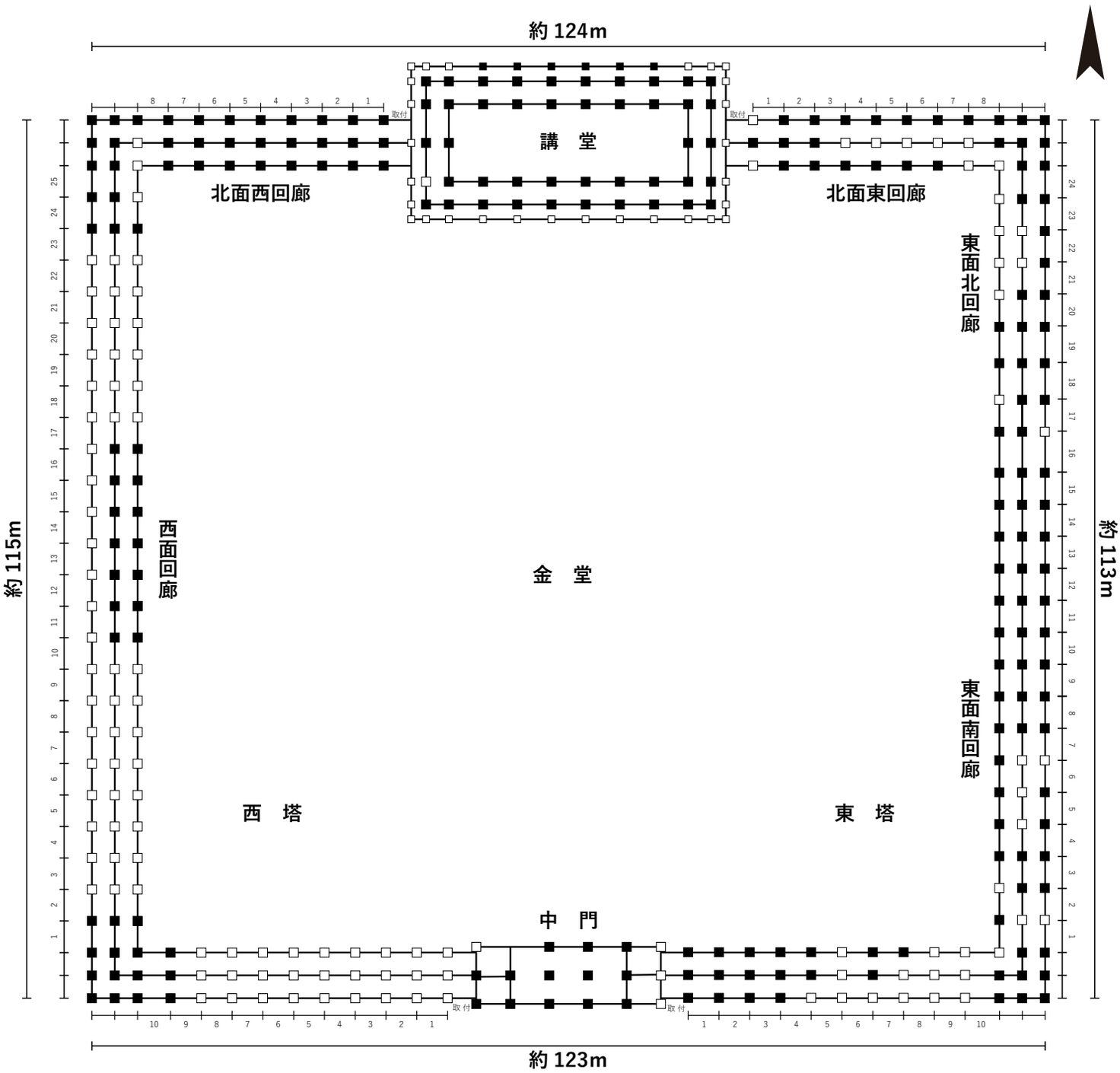


図４　平城第 665 次調査の遺構図（模式図）　１：２００

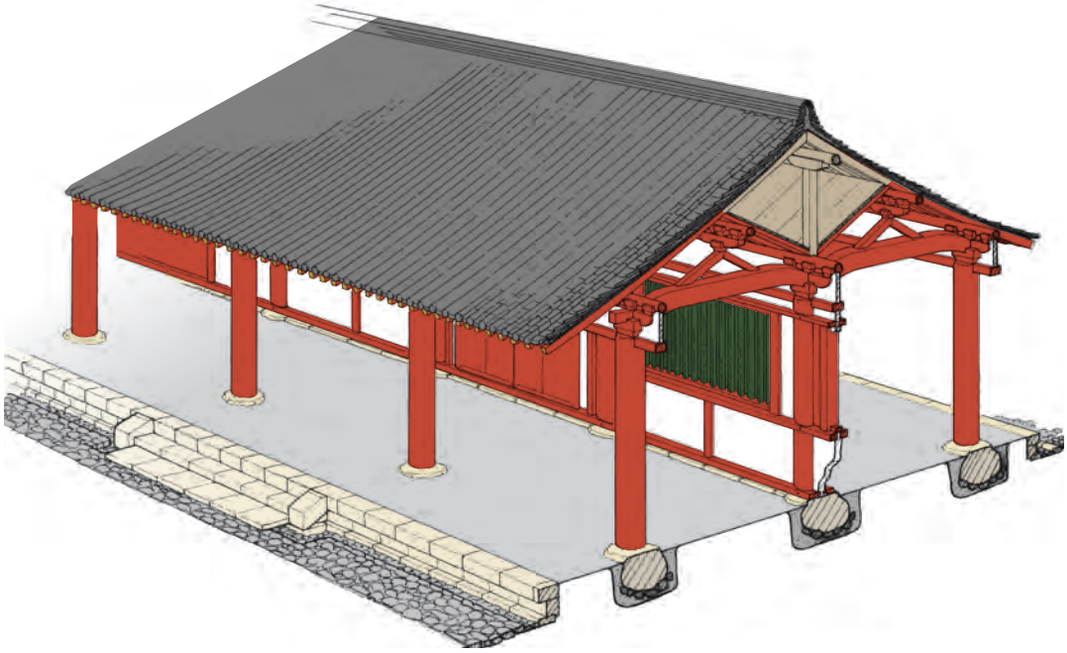


【凡例】

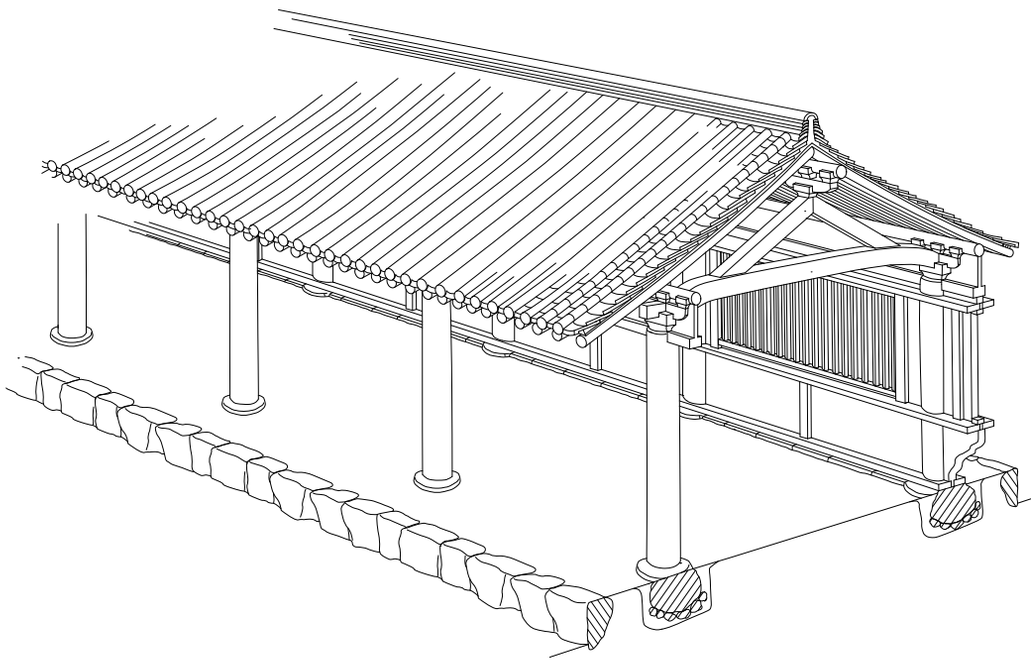
■：礎石据付穴・抜取穴を検出した柱想定位置　　□：礎石据付穴・抜取穴を検出していない柱想定位置

図５　回廊の復元想定図

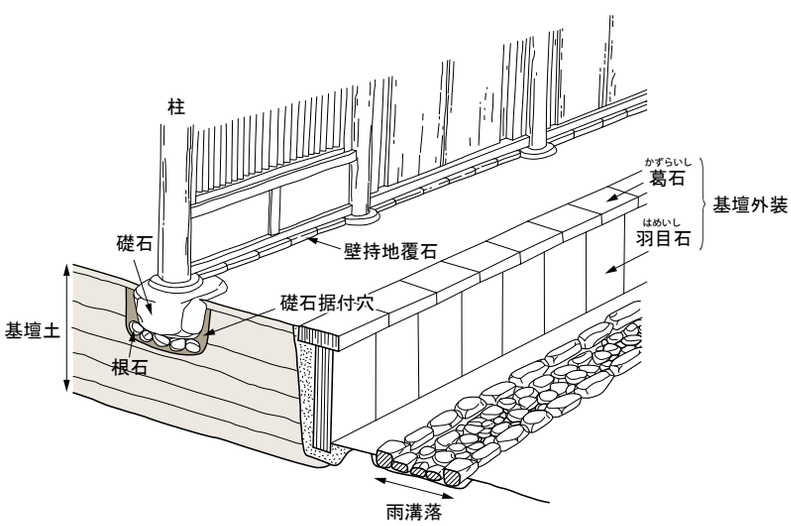
参考資料



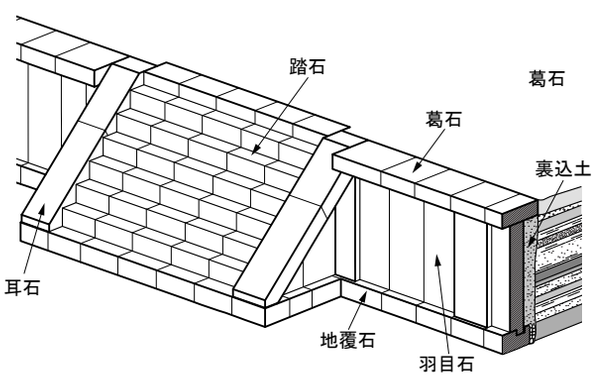
①複廊の模式図



②単廊の模式図



③基壇の構造模式図



④階段の構造模式図